昭和二十四年十月十五日發行（毎月一回　十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

慈光

第一卷・第七號

目次

たゞ念佛して……故・池山榮吉……1
善惡問題の解決……中野駿太郎……5
定散の影消えやらず……山下成一……8
御聖教の御導き……三瓶德英……10

たゞ念佛して

故・池山榮吉

「たゞ念佛して」という言葉は、聖人のよき人のおゝせにきいたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのでもある。

この言葉を信への手引として受入れた人は、かず限りもないことであろう。私などもその一人である。この言葉に引き込まれて、ぢや私もと、急にまねる氣になつて斷然聲に出したのが、あこがれの信界への踏切であつた。

今日我國では、津々浦々にいたるまで、念佛の聲の響きわたつていない處はない。日本人であつて、この聲を或は口にし、或は耳にした覺えのないものは、おさなごを除いては一人もあるまい。さすが大乘相應の日域、かうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物は、その涯しなき流轉の相のうちに、鐘の音をさえ諸行無常とひびかせて、遠く近く、裏に表に、人生最大緊急の問題、たゞまことなる念佛への關心をそゝらないものはない。

そも〳〵念佛は、救のためにあらわれた力の、その目指すものへの呼掛である。それをそれとも知らないで、うつかり聞きながす人の、あまりにも多きに過ぎるのは、まことに歎かわしい限りであるが、考えて見れば、億劫にもまうあいがたい弘誓の强緣とあるからは、また怪しむべきではなく、寧ろたゞ聞いたというだけも、その人とかの力とをつなぐえにしの糸は、はやくも用意されたものと、看做されるのを多とすべきではなかろうか。

進んで念佛の意味を聞いたり、考えたり、とにかく口にしたりする段になつては、もう糸の端と端とが或る交叉狀態になつて動きつつあるのである。が、それがしつかり結び上げられる迄には遲かれ速かれ若干の時を要するのが常で、その間には、深淺、强弱、方向の正否などの視點から、いろ〳〵の段階が認められ、さま〳〵の轉化が行われる。

が、その中で、念佛のいわれを聞く事は聞いても、それについて多少の考慮を拂つているというだけで、まだ實際念佛するという程に立ち至つていない一類と、念佛にある價値を認めて、兎に角念佛しつゝある一類とでは、最後の目標のへだたりから見て、龜と兎の馳けくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なお遼遠なのに較べると、後者の地點からはもう山が見えている。念佛の出る出ないを界として、前者は單に素見の客であるに反して、後者は既に謂わば力との直接交渉の圏内に立入つたものと見られる。

力との直接交渉は念佛を通して行われる。その進捗の程度にも、見方によつては矢張幾多の段階があり、轉化もあろうが、特に際立つたそれの三つがある。念佛を目的達成の一助と見るのが其の一で、目的達成への努力の集點とするのが其の二。

念佛も棄てたものでないとか、念佛も結構役に立つとか、念佛は他の何者にも劣らないとか、さては念佛にかぎるとか、それ〴〵の思惑に動機づけられて、おのがじし、應分の力を持ち出して念佛に精進すると、その効驗は爭えないもの、多かれ少かれ或る法悦が感じられる。が困つた事には、いつも柳の下に泥鰌がいるとは限らない。どうかするとさつぱり駄目な事がある。法悦の不連續性、これが其の一其の二共通の徵候で、かうした徵候が存續する間は、まだ本当に念佛が手に入つたものでない。その關を越すには、今一度の轉化に待たなければならない。日頃念佛を心にかけて扱つてはいるものゝ、どうもしつくり身につかない。どことなく拍子が抜けて、手持無沙汰の感を免れないのは、畢竟念佛を作善の具に供しようとするからである。我が手でまかなう資料として扱うからである。

念佛の一行にさえ及びがたい身であると知れては、地獄一定は免れない數と、焦燥の五里霧中に徨彷して、空しく指南の法輪を眺望する折柄、幸に宿善開發の時節到來、今迄に覺えない聞を念佛に聽き取つて、念佛は救わんとする力から、力なきものへの呼かけで、念佛する人から見れば、たゞそれに應け答えをする迄のもの、つまり力そのものの発動のほか何でもないと心證する。これが轉化の其の三である。

念佛は餘計なものとして作られたものでない。なくてはならないものである。と同時に、他の何物を以ても代えることの出來ないもの、從つて單獨行動は念佛本來の性分で、念佛と外のものとの共動を策するのは、この絶對性への反逆であり、冒瀆である。念佛はただ惜しみなく奪うものの上にのみ、あまねくその全分を光被する。其の一其の二の念佛が、とかく坐りが悪かつたのに、其の三に至つて俄かにぴつたりおさまりがつくというのも、畢竟このゆえである。

念佛を聞き初めてから、惜しみなく奪い終るまで、意識に上るにせよ上らぬにせよ、それからそれと常不斷の過程を辿つてやまない幾多の生成推移は、箇々の事象から見れば、或は桐一葉、或はいとし子の死、さては空中の聲、緣の下の聽聞など、千差萬別、それぞれの機緣に由來するが、その原動の源にさかのぼれば、一に力のもよおしにかゝると首肯かされる理由がある。念佛は自働する。念佛は自省を促し、自省は念佛の意義を深める。一方念佛の意義がいよ〳〵深く信知されるに從つて、他方ます〳〵深く自己の何たるかゞ認識される。信知の深まりと自省の深まり、兩者は相關的に働きかけて、交互に促進を競い合う。がその實一つ楯の兩面と謂うべきもの、結局歸命の一念に抱擁する傾向に動くのである。落着くところへ落着かせる。からくりの妙、たゞ不思議と呆れるの他はない。

念佛は招く「一心正念ニシテ直ニ來レ」と。念佛の心意氣がよくこの言葉に現れている。今これを放浪の旅を續ける一人子の歸りを、ふるさとに待ち佗びる母の心に引き合わすことを許されるならば、直來をスグキテオクレヨと訓じ、一心正念にオネガイダカラと假名を振つても、さう見当は外れていまいと思う。オネガイダカラスグキテオクレヨ、この哀々惻々の衷情が、相手の心に慘透し、感銘した極促が、やがてそのまゝ内から滲み出る切々の歸心ともなり、「念佛まうさんと思い立つ心」ともなるのであつて、この心境の變化こそは、力とその目的物との間に、二度と解ける氣遣ひのない堅い固い結を仕上げるのである。

日常抄

玉尾延忠

昭りくもる苑より仰ぐ御堂には大恩山の扁額古し

今日の日も終りとなりし眼に洗みて餘光の空がくぎる山波

感傷も早や失せゆきて胃の腑より雉が食みたる木の實を出だす

或る時のこころを占むる愛憎の對象としてわが家のねこ

彼も吾も自が子と觀れば依怙なしと吾の立場を護りたまへり

君を悼むおほやけびとの聲聞けば吾はたつきにかまけてありぬ

粟屋より吾を頼りて來る母子雨の二日を來ねば氣づかふ

一日の仕事終ふれば紙幣數ふ白慰ともつかず自嘲ともつかず

古への大き聖のおろかさにありなば今日の憤りなし

久々に蠟のみあかしあげたれば繪像の阿彌陀の後光かゞやく

この新なる心境の湛える雰圍氣は、「たのもしさ」を其の基調とする。「たのもしさ」は、稱えるものの心に殘る餘音であつて、一度キャッチし得たら占めたもの、隨時隨所に再現して立消に歸する虞れのないのがその特徴である。固より人生の行路、愛欲名利の噪音の絶え間はないが、噪音の高まれば高まる程、冴えかへる念佛の中に、いよいよつのる「たのもしさ」は念佛する者に絶えず繰り返される體驗である。此の立場から「神を知つたと思つていた私は神を知つたと思つていた事を知つた。私の動亂は其所から芽生えはじめた。」とある有島武郎の述懐を聞けば、摑取の心光の保障を缺く信知の儚さが思われて、轉た同情に堪えないものがある。

或るルーテル研究者の說に依ると、ルーテルも亦その信の確立には隨分苦労したものである。神を信じようとして信じ得ぬ惱み、これはルーテルに取つて、極重の罪惡としての自覺であつた。神の有無を疑つたのではない。神に近づき親しむ氣になれなかつたのである。それはその筈、ルーテルの心境に映じた神は、我々が觀音菩薩に見るような、春風駘蕩の和やかさは氣振にも見えず、秋霜烈日、

閻魔大王のような凄じい相好の持主で、外に瞋嫌の焔を現じているばかりか、内にも情け容赦も荒々しさを懷いているとしか思えない。かうした神を信ぜよとは、光秀に對へて飽くまで信長に信頼せよと強うると一般、無理な注文、出來ない相談をもちかけるというものである。この無理な注文に應じ、相談に乘るべく、隱忍自重、動ともすると擡げようとする抵抗のを自頭から押えて、渾身の勇を鼓しつゝ、我等の父たる神の肯定をめがけて精進したのが、ルーテルの求道の過程で、惡戰苦闘の果、精もつきて到頭我を折つて參つてしまつた處が、即ち、信の成立となつたのであつたが、それも一度こつきりけりがついたというのではない。その後もときゞ抵抗の嵐、否定の浪が盛り返してくるたびごと、同樣の奮闘が繰り返されなければならなかつたということである。

こんな話を聞くにつけても、偲ばれるのは、念佛というもののあることのありがたさである。もし念佛というものがなかつたなら、私達も恐らくこれと似たような動搖の惱を反復しなければならないであらう。それなしには生きられぬ「たのもしさ」を伴れる念佛、「まうさんとおもいたつこゝろ」をきつかけに、念佛とはぐれる氣づかいのない「たのもしさ」。我が意氣込みの強きでつかまえて離さないのではない。頼まれる力の方から絶えず供給して止まない念佛。聖人は私をこの念佛にひきあわせて下さつた。筆に口にあらゆる方面から念佛の奥義を開闡して鈍感な私にも、多少の「たのもしさ」を味得させて下さつた。ほんに私に取つて聖人は、空前にして絶後なる「無碍の一道」への最大の案内者である。

× × ×

人間の悲慘

パスカル

人間は生れながらにして「信じ易く、疑ひ深く、臆病であると共に、大膽である」。本來人間は矛盾的存在であるその上に頭から足先まで私欲私情がギッシリ詰つている。

この私欲の魂の人間は常に幸福を懸命に追求しているが「人間は現在の樂しみを詰らぬものだと思う、併しまだ味わつて見ない樂しみの詰らないことを知らない」だから幸福から幸福へと轉々として、而も少しも滿足することが出來ないから遂に倦怠に陷る。

倦怠ぐらい人間にとつて堪え難いものはない、何等の熱情もなく、氣晴しもなく、仕事もなく完全に休んでいる時位苦しいことはない。この退屈に苦しむ時こそ人間は沁泌、自分の無能なこと、他人から見捨てられたことを感ずる、すると悲しさ淋しさが心の底から湧きだして人間は憂鬱と絶望に打ち沈む。

善惡問題の解決

中野駿太郎

善惡問題と宗教

近角先生の信仰は、私たちのよくなれないところを佛陀が見て下されたという、こゝ一點を頂くことが急所である。ここ一ッが徹底すれば、そこに百八十度の回轉がなされて、舞臺は一轉することになる。もともと近角先生の信仰というても別のことではなく、近角先生の信仰、即親鸞聖人の信仰なので、そこに一分一厘の相違もない。ただ親鸞聖人の信仰の眞髓を、もつとも今の人にわかりよいように、御自身の体驗を通じて克明に說いて下されたのであつて、私たちは親鸞聖人あり、「歎異鈔」があつたとしても、もし近角先生ましまさずば、恐らく信仰は頂けなかつたであろうと思い、先生の御宏恩を感謝せずにはいられないのである。

そこでこの「私たちのよくなれないところを佛陀が見て下された」という、このことについて、少しく詳細にわたつて說いてみよう。

まづ私たちの考えのうちで、いつも心の底にあることは、「善し惡し」ということである。このよしあしということをはなれては、私たちの日暮しは一日といえどもなり立たない。これは小は個人と個人との間、大は國と國との間、思想と思想との間がみなこれになつている。それではこの善し惡しの標準というものは、はつきりしているのであるかというに、はつきりはしていない。極端に云えば、てんやわんやであるといわざるをえない。

それでは善し惡しということはないのかというに、ないことはない。否、この善惡の問題に徹底的解決を與えるものが宗教なのである。宗教は絶對を要求する。絶對の善か絶對の惡か、この二ッしかない。そしてそのけじめが判然としている。絶對ということは、言い換えれば本當ということである。本当の善か本當の惡か、このいづれかである。

これを眞僞という方面から考えて見るとよくわかる。ここに雪舟の画があるとする。そうするとそれは、本物か僞物かいづれかである。どれほどよく似ていても、僞物は僞物である。本物と僞物との中間のもの——、そんなものはありはしない。善惡ということもこれと同じことで、本物の善か僞物の善（すなわち惡）か、そのいづれかである。それなれば、本物の善とはいかなるものであるか。

信仰の徹底

たとえば人に善くする場合、どんなに人がこちらを悪く思つて突つかゝつて來ても、それに對して少しも悪るく思わず、どこまでも善くしてゆき、ついにさしもに悪るく思つた相手もこちらの善意のために驚きあきれてしまい、こちらの善に同化されて、私が悪るうございましたと悪意をひるがえしてあやまりはてゝしまう。そこまでやりぬけるのが本当の善である。それではその善が私たちに出來るかというに、結局出來ないというところへ出てしまう。

ところがその善ができないとすれば、はじめ善くしたのも、やがては先方から善くしてもらいたいという欲する心、求むる心があつてやつたことである。名利のまじつた善であつて本当の善ではなかつたということになる。專門語ではこれを「雜毒の善、虛假の行」という。これは近角先生のよく言われた五分五分の善である。私たちの善は、よしそれが善であつても五分五分の善をはなれることはできない。五分五分はなれた善は私たちにはできない。ひとたび眞剣になつて考えてみると、たれでもこゝに出ることになる。

善いものを善いとしてとり、悪るいものはいけないとしてしりぞける、それがこの世の原則である。しかしつきつめて考えて見れば、私たちは本当の善はできないというところへ出てしまうのであるから、この原則の下には生きられないことになる。しかるに佛陀はかねてそこを見て下されて、その本当の善のできないところを見たから、それを悪るく思わぬぞ、どこまでも憐れむぞと言うて下さるのである。これが五分五分離れた佛陀の絶對のお慈悲なのである。それで善くできないで苦しんでいたものが、そのお慈悲を知らされるなり、これは有り難いと、そのお慈悲一に滿腹せしめられてしまう。これが信仰の徹底である。

の世界に舞い戻つて苦しむことになる。

跡戻り跡戻りして辿るらん
甲斐なきことに心迷いて

けれどもその都度、自分は善くできるのか、何一つとして善くできはしないでないか、そこを見て下されたのではないかと、佛陀の慈悲にかえつて、再び信仰の軌道に戻らせて頂くのであつて、これが信後相續の姿である。それゆえ入信後、この心の工夫が大切となる。

どうもこの私たちは善くなれないという、ここのところがなかなか解りにくい。どうしても悪るくてはいけぬという心が取り去れない。これでいつも行き詰つてしまう。だが、この悪るくてはいけないという考えが我慢である。この我慢がとれないので苦しむ。しかしこの我慢がとれたら凡夫ではないので、我慢のとれぬところが凡夫の凡夫たる所以である。それゆえその我慢のとれぬものと見て下されたという、そこを知らせて頂けば、こゝにはつきりと、我慢のとれぬ淺ましい姿を見せてもらうことになるので、そこから懺悔と感謝との情が油然として起つてくる。

信後活動の原動力

五分五分心のやまぬところを見て、五分五分はなれたお慈悲で向うて下さる、そのお慈悲に救われて五分五分心の根を切らせて頂けば、こゝにはじめて迷いの境界にいた身であることをはつきりとわからせ頂き、今度はこの佛陀絶對の境地より、この光明を人々に傳えるべく活動することになるので、こゝに人生の意義が生じ、ほんとうに生き甲斐を感じることになる。信後はどうせねばならぬ、こ

人生最大の幸福者

かくしてそのお慈悲を知らせて頂いて、徹底的に救われたのちはどうなるかというに、今まで五分五分でやつていた、その淺ましいところ、それのやまないところを見て下されたお慈悲に救われて見れば、このとき私たちの心は、五分五分の心を佛陀の五分五分はなれたお心のため同化せしめられ、そちらの方へ引きとられてしまう、この人生から超絶して、佛陀の境界に移轉せしめられてしまうのである。これが救いということである。救いということは何も死んでからのことばかりでなく、信の一念にかく人生より佛界へと救いとられることを言うので、ここを取り落したら、信仰の價値はないと思う。

哲学的には、絶對否定は絶對肯定だという。たしかにそれはそうであろうが、ただこれを單なる理窟で、凡夫の妄念による觀念でこう云つただけでは本當の力とはならぬ。しかし今云つた私たちの善くなれないところ（絶對否定）を佛陀が見て下された、こゝ一つをわからせて頂くことによつて、絶對肯定に轉ずるので、こゝが「高僧和讃」（曇鸞和尚章）にある

無碍光の利益より
威德廣大の信をえて
かならず煩惱のこおりとけ
すなわち菩提のみずとなる

の味わいである。

しかし人間というものはしぶといもので、こうはつきりどわからせて頂いて、踊躍歡喜し、人生最大の幸福者であることを自覺するのであるが、またいつの間にかその法悦を忘れてしまい、五分五分

うせねばならぬということはなく、自分のはからいですることはみな悪である。そしてそこを見抜いて、全部そつくり救つて頂いたのであるから、信後は善し悪しはなれて、御恩報謝のためにやらせて頂くことになるので、これが信後活動の原動力となる。

こゝの味わいを、かの「歎異抄」の結文に、いかにもあざやかに表現されてある。いまそれについて少しく申させて頂こう。

「まことに如來の御恩ということおば、さたなくして」私たちが五分五分やつて迷い苦しんでいる、そこを憐れんで下さる如來のお慈悲、それに氣づかせて頂けばたちまち闇ははれるのであるが、その肝腎なことに背を向けていて、氣づこうともしないで、「われもひとも、よしあしということをのみもうしあえり」善いの悪るいのと、迷いのなかから五分五分を云いあつている。しかし「聖人のおおせには、善悪のふたつ、總じてもて存知せさるなり」親鸞聖人は、自分は善も悪も知らぬと仰せられる。

「そのゆえは、如來の御こころによしとおぼしめすほどに、しりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどに、しりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど」なぜかというに、如來のように絶對の立場、悟りの境界に立つておれば、眞の善悪もわかろうが「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに」迷いの凡夫や無常の世界のことは、みなてんやわんやで、何一ツ本当のことはないが「たゞ念佛のみぞ、まことにておわしますとこそ、おおせはそうらいしか」そのてんやわんや、やつさもつさやつている、そこを憐れむ佛のお慈悲に夜を明けさせて頂いた境地、それだけが本当であると仰せられたことである。——

この「歎異鈔」のお言葉は、世の善悪問題を徹底的に解決して下された千古不磨の金言であると思わせてもらうとともに、人々が一日も早く、この境地に目ざめられんことを切望してやまない。

定散の影消えやらず

山下成一

長い間、聞法に親しみ眞宗の教養を十二分に理解し、疑惑を殘していないと、自ら深く信じながらも氣づかずながら自力定散の影深若亡く、いつまでも若存若亡のハッキリしない陷穽に落ちつゝ、充たされぬ空虛を抱きて悲しまるゝ方も少なからぬようであります。

春淺き某日、法緣を惠まるゝに当り、早朝私を訪うて四十年の聞法今猶その実を結び得ぬ事を心から悲しみつゝ熟心に質問された古稀の年に近き老夫人が、終に自らの定散自力の影に氣づかれて忽ち大歡喜の人となられし事例を錄する事も、萬更蛇足を加うるわけにもならないでせう。

聞けば同姉は同日蓮師御遠忌參拜に團參すべきを見合せて、己が信心の解決へと急がれし事も寧ろ蓮師の思召に遇いまつる事となつたのでありませうか。同姉は直に私に訴えられて曰く、

「私は眞宗の御因緣が深くて過去四十年に亘り聽聞を重ねて來ました。おかげで、御教の筋合には何一ッ疑いはありません。私如き罪深く地獄一定のものは、本願を信じお念佛してお淨土往生させて頂く外ない事を確信して居りますが、私には不可解ですがその法喜が御緣が去れば直に消え失せます。モット深い喜びが發見されないであらうかとそればかりを苦にして今度こそは今度こそはと一生懸命で聽聞しますが、いつも裏切られてしまい悲觀にくれまして自分には宿善がないのかとまで愚痴にかえります。いろろの方に御尋ね申し上げて、眞に喜べるようにと今まで努めに努めて來ましたが、その內には佛力自然の故によろこべるようにして下さるからあせらずに聽聞を重ねよ、と御教化を蒙るばかりで、しぶとい私は今に頂けません。老の身の今にも知られぬ無常を思えば心身共に堅くなります。何とかわからせて頂きたい」と血を吐く思いで切実に求められたのであります。

私はその切なる求道のお態度を拜見し、深い敬意を表しつゝも同姉の心の底に自力定散の影が潛んでいて、いつまでも佛様の大悲心を受付けぬいみじき障りとなりてる事を單刃直入的に申し上げたのであります。曰く

「尊姉は四十年の聽聞に依り罪業深重の身であり、実に地獄一定のすみかであり、到底助かる道の打ち絕えた無力無能人でありとハッキリ信知せられてるように思われていても、思いをこらし聽聞を重ねれば大悲攝取の御本願がよくわかるであろうとの期待を捨て得ないところに知らず知らず自力を許し、聽聞に依つて信心の寶珠を発見し又之を獲得せんとする自惚心を捨て得ないではありませんか。

尊姉の努力により発見し得べしとする予想の盡きないのは、聞けばわかる、磨けば光る、とする定散の影が、尊姉の心に喰い入つているのではないでせうか。聽聞を重ねる事だけは結構な行事とする處に己れの賢善の相を肯定してるのではありませんか。誠に傷ましき極みであります。

近づかんとする事が却ていよいよ遠ざかりつゝあるのでせう。直に佛様の生起本末を仰がずして、之をわからんとする努力がいつまでも他力の御廻向を拒みつゝあるのではないでせうか。

然し佛様は久遠の昔より尊姉の、私の、一切衆生の愚惡限りなき事をかねて知らしめし盡されて、之を救い果さんと正覺を成られし御方であります。あくまで定散自力のすたらぬ事を泪見し給うて、あくまで矜衿の誠を以てのぞませ給いつゝ、何も彼も承知してる、一切を任せよと大悲雷を放つてお呼びづめであります。今更我が心身の世話をやく必要もない事であります。信に入るまでは九分九厘まで無我に佛前にひれふすつもりでも僅かに自力の影が殘りて居れば、終に全幅の御眞實を頂き難い事になつているのです」と一氣に申し上げたのでありました。同姉は終始感に耐えぬ面持にて傾聽せられつゝありましたが、私の言の終るを待つて、「何という驕慢な私でありましたか。それほどまでに御見拔き下されての大悲心にましましたか」と數年の疑團氷解して大歡喜の方となられました。

「うれしさを昔は袖につゝみけり、こよいは身にもあまりぬるか」

なとの道歌が同姉の個中の消息を言い盡してるようによろこびが身にあまり、しばしば念佛の聲の絕えなかつたのでありました。本当に有り難い御緣でありました。かく申す私も元來宿業の体であり、あくまで定散のすたらぬ現實を省みて、如何にも根强い自我の暴力に大悲の御むねを惱まし奉りつゝあるのであり、生を終るまで一秒一瞬の間も素直に御眞實を拜戴し難き自分を省みて、誠に傷ましき事をざんげするばかりであります。人様の御質問に對してハッキリとお答え申し上げ得ても、さて自分の問題となれば、いつもいつも落第であり毎日血みどろの生活をくりかえす外ありません。それは私そのものが煩惱の塊であるからでせう。それ程の罪業深重な私一人をいよいよフビンと思召し、あくまでお見捨て下さらぬ久遠の御親の御眞実を思い浮べて唯々念佛し奉るのみである事を附言させて頂きます。

日沒無常偈

人間總々にして衆務を營む
年命の日夜に去ることを覺らず
燈の風の中に減して期し難きが如し
忙々たる六道定趣無し
末だ解脫して苦海を出ることを得ず
云何してか安然として驚懼せざらむ
各々强健有力の時に聞て
自策自勵して常住を求めよ

御聖教の御導き

三瓶徳英

私は今は隠居の眞宗の一老僧でありますが、宿業有り難しとでも申しませうか、省みますれば二十九歳の暮頃、僧侶生活の現實について深く考えねばならぬ事件に突き當りました。無反省に過ぎた生活を見つめますと、全く心口各異、言念無實であり、表裏不相應な僑慢生活であり、法施をすこしもしないでみだりに財施を貪り、施物の多少に隨って人々を差別待遇し、學なく德なくして上位榮達を望み精勞につとめずして美衣美食を欲するなど、全く支離滅裂の自分が見出され、特に淺間しいことは自身には信心もなくして人に信心を勸めんとする無慚な驕剛兒である、即ち蓮如上人の嚴誡にあてはまる奴ではないか、等々の事を考え、私という奴は何とした横着者、惡性人であろうか。何一つ採る處の無い奴ではないかと自分で自分を叱って見、生れ落ちるとから佛物を頂いて三十の年まで育てられて此有様は何事か。佛化助成などは思いもよらず、自信教人信の出來ない私に僧侶の資格がどこにあるとか？　觀經の「諸惡業を以て自ら莊嚴する」の御文は全く私に對する御嚴誡である。此上自分を飾り世人を誤魔化して生きる譯には行かぬ、僧侶は斷然止めねばならぬと、彼を思い此を考え、二日二夜の間病氣と稱して同團を引被り就床しました。當時の私の胸中の苦悶は千斤の鐵板を以て身心を彈壓せられる思いで、食事も喉を通らず更に空腹も感ぜず、眠りもとれず頭腦は益々さえて來るばかりでありました。「自分が善いと思う間は氣樂だが、自分が眞に惡いと氣付いたら、心身の苦惱は極度に達し、七轉八倒、身の措き處が無い有様である」と近角常觀先生も述べられているが、全く其時の私には阿闍世王の苦悶も偲ばれ、唯々信心がほしいと言う心で胸一杯でありました。

私は最早世間に顔出しは出來ぬ、死ぬか、或は脫走して行方を眞まして信心を求めるか、何れにしても私は僧侶は斷念せねばならぬ。かと言っても信心の問題は僧侶を止めても解決はつかない。俗中の俗、惡中の極惡の自分であると泣くにも泣けぬ思いで、近角先生の求道誌、信仰の餘瀝、懺悔錄などの御著書を專ら讀み續けました。先生の御著述は幾度拜讀しても靈味が盡きません。

苦悶の第二夜、勿体ないとは思いましたが教行信証と七祖聖教を寢間に持ち込み、信の卷には信心があるべしと思って、急いで拜讀して信心を探しましたが得られません。それでも私の胸に深く刻まれたのは、特に涅槃經の阿闍世王の苦悶と入信の箇所で、その御文は再三再四拜讀いたしました、然し信心は得られませんでした。曉近い頃、苦しまぎれの自暴氣味で、信仰の餘瀝を手當り次第に開きました處、丁度「生ける懺悔」の章が出、直に拜讀しましたが、これ迄幾十回か讀んだ此の御文が初めて拜見する樣に有り難く、私は今現に、內心懺愧に境えず苦惱のドン底に居るが、先生はこれを生きた懺悔であると仰せ下さるのか、私は生きて居るのかしら、生きて居れば救われるかも知れぬぞと思った時、フト

眞心徹到する人は、三品の懺悔する人と等しと宗祖はのべたまう

との御和讃が胸に浮び出ました。之は善導大師の禮讃に出てゐる筈だと思ひ、禮讃をひらきましたら、「懺悔に三品あり、上品の懺悔は血の汗、血の涙を以てし、中品の懺悔は汗と血の涙を出し、下品の人は身熱し涙を出して懺悔す、此三品の差別はあれども、皆解脫分の善根を植えたる人也、今生に此の如く懺すれば重障を滅盡せしむるも、此の如くせざれば日夜急に求むれども益なし」と說かれ次に「若しなささる者は知るべし、流涙、流血等に能はずと雖も、但し能く眞心徹到する者は上と同じ」とある御文を拜見し、但し能く等の十一字を五度位繰り返すと同時に雷に打たれた樣にとでも申しませうか、驚愕の極度とも言うべきか、びつくりしてハネ起きました。ボンヤリとしてしまいましたが不思議にも今迄の苦悶が跡方もなく消えました。今私は內心本當に惡いと思うている、之が近角先生の仰せられる生きた懺悔で、善導大師や祖師聖人の仰せられる眞心徹到であらう。私がこれ程の極重惡人なるが故に、如來の作願は苦惱の私を見捨て得ずして、かねてより可愛想と思召し下されて遂に私をして機の眞實を知らしめ、超世の大慈悲に攝めとり下されお六字の宝を惠施し給うたかと大喜悅、大滿足。千斤の重壓はいつの間にか取り除かれ、身も輕く心も安く、暫時この大轉換にボカンとしてしまつたのであります。

その時の氣持を申して見ますれば、自分で計らい、自分で工夫した自力の境地が全く行き詰つて、信心を捉えたい、苦しい胸を樂にしたい、死ぬに死なれぬ、生きるに生きられぬ、境地を突破したい等の自力の計らいで力んで力みぬいて、突きあたり行き詰つた堅固な鐵壁を押し破らうとして永い間、やる瀨なく地團駄蹈んで居た處へ、何人かゞ何處から來られたのか大きな力で堅固な鐵壁をからりと壞し、取り除けて下さつた。アット驚く一念の端的に、坦坦たる平安の大道が私の前に現れました。一切の業繫を除かれた解脫道、罪惡も業報を感ずる事能わざる無碍の一道、魔界外道も障害する事能わざる安全地帶が眼前に展開されたのであります。あゝ有り難い、嬉しい、忝ない。苦惱の心は安樂の心に轉じ、自力のはげみも雜行雜修のつとめ心も消え失せて、他力任運の念佛に心廣く躰ゆたかな心境に引きづり込まれ涙と念佛が湧き出でて止まらぬのでありました。

やがて寢衣の儘にて本堂に參り、御開山聖人の御繪像に咫尺して拜めば生き〳〵とした歡喜微笑の御姿に拜まれ、本尊前に佇めば、御木像躍動し玉い柔軟微笑の生身の如來と感ぜられ、私如き者を念佛する身にして下さつた御眞實に頭上らず、私自身の喜びよりも諸佛聖人方の御慶びは如何ばかりであろうか。更らに恩師近角先生の御引導、宗祖、祖師の御化益、兩親初め一切有緣の智識の護持養育なかりせば此の罪惡深重煩惱熾盛の私は永劫救はれることもなかつたであろうに、噫々。

爾來暫時の間、法悅の情熟醒める遑もなく、自分でも狂者にならぬ樣にと自誡しつゝも、已知未知の人を擇ばず私の喜を語りつゞけ、爲めに他力不思議の故に流涕慚愧され、念佛に歡喜安心された勝緣にも數回遇ひ、共に泣き共に喜びました事もありましたが、顧れば俺、なれば、こそと知らず〳〵に高上りし驕慢、勝他の醜き煩惱に氣付き慚愧の外なく、近角先生に愚書を捧げて御教訓を蒙むりました。其後性來の怠慢邪見に返りましたが、飽迄も御見捨てない大悲照護の下に念佛させて頂き乍ら古稀に近き今日まで此の苦しい人生を何の不安もなく過させて頂きました。

其の間、昭和九年六月から東京に移りまして近角常觀先生と常音先生の御教導と御援助を蒙りましたが昭和十六年、太平洋戰爭の直前に常觀先生は遂に淨土に還皈遊され、先生から度々承りました

明日の夜は出でますものとしりながら
入るさの月の惜しくもあるかな

の御歌を思い浮べて恩師の名殘を惜んで居ります。其後激戰に相成り　のため皈國し病妻と共に今は隠居して靜かに念佛させて頂いています。

あとがき

△池山先生の十二回忌を迎え、先生の輔最後の御原稿を頂きました。京落蓮華谷の遊林荘に木枯の風吹き初める頃、文字通り念佛の息絶え終られました。今はたゞ信の道に先生の栞を見出し、念佛の中に先生にお遭い申すばかりであります。

ことに本原稿は、三願轉入の信の姿を御示し下さいまして、切々哀々、選擇の願海に直入せよかしと念ぜられて、京大學友會館で御講話下された骨子であります。

△善惡問題の解決の中野先生の御原稿は、人生問題解決の鍵を懇切叮寧に御示し下さいました。ことに「私たちのよくなれないところを佛陀が見て下された」の一句、魂の奥深く貫ぬいて身に滴み徹る金言であります。

中野先生は目下東京都千歳局區内世田谷四丁目七四〇勝光院に住んで居られますが、中學御卒業の頃から道德の行き詰りを知られ、文藝に進まれ、更に哲学に安住の地を求められましたが駄目で、遂に佛教に進まれ、近角常觀先生の膝下に走せ參ぜられて、大正十三年の末、積年の疑團を一擧に氷解せられました。かくて四ヶ年の近角先生の御教化を蒙られた御腐心は誠に慘怛たる道でありましたが、爾來念佛の人として三十年近い月日を各方面に御活動頂いている稀有の師であります。今回慈光誌に近角先生御教化の急所と中野先生御了解の要を御誌し頂けましたことは御禮の申様もない次第であります、今後共に御指導を御願い申しつゝ御禮にかえる次第であります。

△山下先生から、定散の影つきまとう者への切実な御教示を頂きました。「幸に念佛しながら直に報上に生れ得ざる」者への自力我慢の心を露わに御知らせ下さると共に、その故にこそ顯現します本願他力の意趣を明らかにして下さいました。

先生は古稀をすぎられて最近血壓も高く耳鳴などに煩わされていられます由でありますが、其間佛智に催されて玉稿を常に頂けますことは本誌の無上の慶びであります。最近三重縣下の各地に先生の御法幾を結んで頂き、隨所に念佛の友の萬まれて居ますことは末代の不思議と申す外ありません。

△三瓶德英師は目下島根縣邇麼郡井田村に幽棲して居られますが、原稿にありますように御入信後は東京に出られて、近角先生御往生まで側近に侍せられて求道せられたのでありますが、戰爭で御鄉里に疎開して居られます。御一生の求道の跡を御誌し下さいました。

△玉尾氏は六高在學中から池山先生の御訓化を蒙られ、目下は香川縣三豊郡一ヶ谷村古川に住まれ、醫を開業せられてゐます。「讃佛の綫、轉法の因」として和歌に托して御信境を送って下さいました。

○

御送金の方は御申込みの號數と御紹介者のお名前をお記し下さい。

昭和二十四年十月十日印刷
昭和二十四年十月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價　一部金拾五圓（郵税共）
一年分金百八拾圓（郵税共）
名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九
編集兼發行人　花田あや
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人　本伍郎
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所
名古屋市昭和局區内幸樂町二ノ二九
花田正夫方
發行所　慈光社
振替口座番號　名古屋一〇四七〇番